

## 芦生演習林公開講座参加者の動向 II

鬼塚 恵美・伊藤 雅敏

### I はじめに

京都大学大学院農学研究科附属演習林では、1991年度より、演習林の仕事や役割、森林の働きや人との関わりを解説する目的で公開講座を開催してきた。1991年度から1995年度の動向については黒田(1996)がすでに報告している。この講座も2000年度で10回を迎えたので、1996年度以降の参加者の動向をまとめ、黒田(1996)との比較を行う。

本報告では、黒田(1996)に従って公開講座の最終日に行っている参加者へのアンケート結果をもとに分析する。使用するデータは、1996年度から2001年度までのアンケート結果のうち、資料不足である2000年度分を除いた5か年分である。アンケートは公開講座の運営、企画、芦生演習林に対する意識等を質問するもので、1993年度以降は同じ内容で実施しており、回収率は毎回100%となっている。

### II 参加者の動向

1996年度から2001年度までの参加者の居住地を京都市とそれ以外に分けて表-1に示した。これらのデータはアンケートではなく参加者名簿によるもので、

1997、1998年度のデータが欠落しているものの、この間のおおよその傾向についてみることができる。データのある4か年全体では、京都市在住者が29.0%を占めている。これを年度別にみると、1996年度は33.3%、1999年度は41.3%、2000年度は25.5%、2001年度は16.3%であり、1999年度を境に、京都市在住者の比率は減少傾向にあるといえる。

アンケート結果から明らかになった参加者数及び男女比は表-2の通りである。例年公開講座には定員50名の募集に対してほぼ二倍の数の応募者があり、抽選で参加者が決定される。年度によって参加者数が異なるのは、当日キャンセル等の影響である。男女比は、5か年全体で男性55.0%、女性45.0%とやや男性の方が多いが極端な差はみられない。また、参加者名簿より集計した参加者の年齢構成(図-1)を見ると、全体としては20代の学生を含む若者層と50代~60代の熟年層が多くなっている。3日間の講座ということで比較的時間を自由に使える人たちが参加していると考えられる。

公開講座についての情報の入手方法(表-3)は、新聞が31.9%、知人からが23.5%、ポスターを見たが21.9%、その他が22.7%であった。その他の中には大学のホームページを見た、以前この講座に参加した人

表-1 居住地別参加者数

	'96	比率	'99	比率	'00	比率	'01	比率	合計	比率
京都市	18	33.3	19	41.3	13	25.5	8	16.3	58	29.0
その他	36	66.7	27	58.7	38	74.5	41	83.7	142	71.0
計	54	100.0	46	100.0	51	100.0	49	100.0	200	100.0

資料；公開講座参加者名簿

単位：人，%

表-2 参加者数及び男女比

	'96	比率	'97	比率	'98	比率	'99	比率	'01	比率	合計	比率
男	27	50.0	27	51.9	25	50.0	29	63.0	30	61.2	138	55.0
女	27	50.0	25	48.1	25	50.0	17	37.0	19	38.8	113	45.0
計	54	100.0	52	100.0	50	100.0	46	100.0	49	100.0	251	100.0

資料；アンケート調査結果

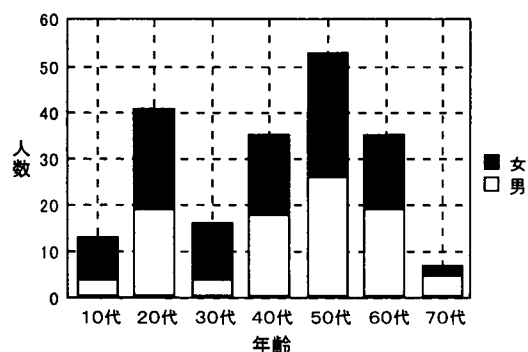
単位：人，%

ONITSUKA, Megumi・ITO, Masatoshi

Participants in open seminar of Kyoto University Forest in Ashiu (II).

キーワード：芦生演習林，公開講座，アンケート

Key words : Kyoto University Forest in Ashiu, open seminar ,questionnaire.



資料；公開講座参加者名簿

図-1 参加者の年齢構成('96,'99~'01)

から話を聞いて興味を持った等という回答もあり、多様な手段により情報を入手していることがうかがえる。

表-4にあげた参加者の交通手段をみると、自家用車が46.2%、鉄道とバスの利用が23.9%、バスが21.1%であり、自家用車での来演がもっとも多かったのは遠方からではなく近畿圏からの参加者が多いためと思

表-3 『公開講座をどこで知りましたか』

	人数	比率
ポスター	55	21.9
新聞	80	31.9
知人	59	23.5
その他	57	22.7
計	251	100.0

資料；アンケート調査結果

単位：人，%

われる。

また、「芦生の森林」のことを以前から知っていたか（表-5）と、今までに何回来演したことがあるか（表-6）を質問した。表-5を見ると、芦生のことをはじめて知って参加した人が23.1%おり、公開講座が芦生演習林の存在をより多くの人に知ってもらう良

表-4 参加者の交通手段

	'96	'97	'98	'99	'01	合計	比率
自家用車	20	24	22	23	27	116	46.2
バス	12	5	15	13	8	53	21.1
鉄道・バス	14	18	8	6	14	60	23.9
その他	8	5	5	4	0	22	8.8
計	54	52	50	46	49	251	100.0

資料；アンケート調査結果

単位：人，%

表-5 『「芦生の森林」のことを以前から知っていましたか』

	'96	'97	'98	'99	'01	合計	比率
今回はじめて知った	10	14	15	10	9	58	23.1
以前から知っていた	44	38	35	36	40	193	76.9
計	54	52	50	46	49	251	100.0

資料；アンケート調査結果

単位：人，%

表-6 芦生演習林来演回数

	'96	'97	'98	'99	'01	合計	比率
はじめて	29	30	28	25	33	145	57.8
1～2回	13	10	12	8	11	54	21.5
3～5回	7	6	7	7	4	31	12.3
6回以上	5	6	3	6	1	21	8.4
計	54	52	50	46	49	251	100.0

資料；アンケート調査結果

単位：人，%

い機会となっていることがわかる。一方、表-6では、今までに来演したことがあるという人が全体の42.2%で、公開講座へ参加して芦生の森林についてより深く学びたいというリピーターも多いことを示している。

### Ⅲ 公開講座に対する評価

この公開講座は例年7月下旬から8月初めに2泊3日の日程で開催しているが、開催希望時期（表-7）については、「今回の時期が良い」が73.3%、開催希望日数（表-8）では「2泊3日」が82.0%ということで参加者の希望する時期と日程になっているといえる。

開催時期についての要望（自由回答）には、春の新緑時期、秋の紅葉時期という希望が多く、春と秋の年2回開催、春・夏・秋・冬の四季折々の芦生を見たいという意見もあった。開催日数では、2泊3日が良いが野外活動を多くして欲しい、もっとゆっくり森林を見て歩きたいという希望が多数あった。公開講座の全体のプログラムはおおむね室内講義が2日、林内実習が1日となっているが、これからすると林内実習を楽しみたいという人には、物足りないものであると考えられる。また、室内講義ではなく、青空教室を行ってはどうかという意見もあり、自然の中で学習したいという希望が強いようである。開催日数については多くの方が満足している一方で、開催の曜日についての要望は、学生は、夏休みを利用できるので良い、30代～50代の参加者は、土・日を含めてほしいと少しばらつきがある。土・日の開催は今後検討し、考慮する必要があると思われる。

参加にかかった費用（受講料、交通費、宿泊費）に

ついては表-9にみるように「満足」、「まあまあ満足」という回答がほとんどであり、「不満」という回答は2.4%だった。「不満」の中には弁当代を安くして欲しい、もっと安い宿泊施設を用意して欲しいという要望があった。ちなみに宿泊施設に対する不満、要望としては、部屋が狭すぎる、宿泊施設が遠い、お風呂の入浴時間が短い、宿泊施設を個人で選びたい等の意見が多い。

次に公開講座への期待について質問した。回答は8項目から複数選択形式となっている。表-10を見ると、「森林を見て歩きたい」が81.3%、「植物について知りたい」が67.7%、「芦生について見たり聞いたりしたい」が64.5%と、参加者の期待はこの3項目に集中している。なお、その他では森全体の仕組みを知りたい、演習林を利用してどのような研究が行われているか知りたい、原生林・天然林を肌で感じたい等の回答があった。これらを参考にすると、参加者の多くは自然とのふれあい、森林や植物に興味・関心を持っているといえる。

企画内容についての要望をきくと、受講生の年齢層を見てもっと受講生に近い講義をして欲しい、素人が多いと思うので英語での専門的なことは止めて欲しいという意見があった。一方、芦生の動物・昆虫について知りたいという意見や、森林・植物を通じた環境問題について聞きたい、樹木識別にもう少し時間を取って欲しい、自然環境保全と森林について、真菌類について、森の形態について、「芦生の地質」・「稚樹の分析」について等、専門的な視点からの様々な要望もある。つまり、参加者には森林に関して詳しい人と、全くの初心者がいるとみられるが、表-10の結果を

表-7 開催希望時期

	'96	'97	'98	'99	'01	合計	比率
今回の時期が良い	35	36	41	40	32	184	73.3
他の時期が良い	19	16	9	6	17	67	26.7
計	54	52	50	46	49	251	100.0

資料；アンケート調査結果

単位：人，%

表-8 希望日数

	'96	'97	'98	'99	'01	合計	比率
1泊2日	2	4	0	5	0	11	4.4
2泊3日	47	39	43	33	44	206	82.0
3泊4日	4	8	6	7	5	30	12.0
4泊5日	1	1	1	1	0	4	1.6
計	54	52	50	46	49	251	100.0

資料；アンケート調査結果

単位：人，%

表-9 参加にかかった費用についての評価

	'96	'97	'98	'99	'01	合計	比率
満足	37	28	24	25	29	143	57.0
まあまあ	17	22	24	20	19	102	40.6
不満	0	2	2	1	1	6	2.4
計	54	52	50	46	49	251	100.0

資料；アンケート調査結果

単位：人，%

表-10 公開講座への期待

	'96	'97	'98	'99	'01	合計	比率
動物について知りたい	8	13	12	9	10	52	20.7
植物について知りたい	40	33	34	32	31	170	67.7
林業について知りたい	9	6	17	11	16	59	23.5
山の生活について知りたい	6	5	8	7	10	36	14.3
森林を見て歩きたい	44	40	43	34	43	204	81.3
芦生について見聞きしたい	40	34	29	30	29	162	64.5
余暇として	1	1	1	2	0	5	2.0
その他	6	0	2	5	9	22	8.8
回答者数	54	52	50	46	49	251	

資料；アンケート調査結果

単位：人，%

みると、どちらも自然を知り、自然との関わりを持ちたいと思っていると考えられる。

参加者に対して、再度公開講座に参加したいかを質問した結果が表-11で、参加したくないと回答した人はおらず、わからないと答えた人13.9%の中にも、新しい内容であれば再度参加してみたい、友人と一緒に参加したい、時間に余裕があれば参加したいとい

う人がおり、ほとんどの参加者がこの公開講座に満足して再び来てみたいと考えているといえる。

また、「再度、公開講座とは別に芦生に来てみたいですか」（表-12）という質問に対して、全体の94.4%の人が来てみたいと答えており、その目的は森林浴、植物観察、散策、森の雰囲気を楽しむ、リフレッシュ、ハイキング、子供たちにも見せたい等であった。

表-11 『今後、芦生で公開講座が開催されたら参加したいですか』

	'96	'97	'98	'99	'01	合計	比率
参加したい	47	40	47	40	42	216	86.1
参加したくない	0	0	0	0	0	0	0.0
わからない	7	12	3	6	7	35	13.9
計	54	52	50	46	49	251	100.0

資料；アンケート調査結果

単位：人，%

表-12 『再度、公開講座とは別に芦生に来てみたいですか』

	'96	'97	'98	'99	'01	合計	比率
来てみたい	50	45	48	46	48	237	94.4
来てみたくない	0	1	0	0	0	1	0.4
わからない	4	6	2	0	1	13	5.2
計	54	52	50	46	49	251	100.0

資料；アンケート調査結果

単位：人，%

## IV まとめと考察

1996～2001年度の公開講座のアンケート結果を黒田(1996)と比較すると、参加者の動向に関して次のような変化がみられる。

まず、黒田(1996)によれば1991～1995年度の応募者のうち京都市居住者の比率は30～45%前後であった。しかし、今回1996～2001年度の参加者の居住地をみると、1999年度を境に京都市の比率が減る傾向がみられ、2001年度は16%まで減少している。なお、黒田(1996)は公開講座の応募者のデータを用い、本報告では参加者のデータを用いている。参加者は応募者の中から抽選で選定(無作為抽出)されるので、応募者をよく代表していると考えられ、実際に応募者データにおいても同様の傾向がみられる。

次に年齢構成についてみると、前回の報告と比較して50～60代の熟年層が増加し、30代の比率は半分まで減少している。

さらに、公開講座の情報入手手段として、前回は新聞、ポスターが多かったが、今回はポスターの比率が半分に減り、知人の紹介やその他が増加している。

京都市居住者の比率が減少傾向にあるのは、情報入手手段が多様化していることと考え合わせると、京都大学関係者や大学周辺にとどまらず、広い範囲からの応募が増えてきた結果と考えられる。また、50～60代の参加者が増えている傾向は、先述したように時間

を自由に使えるという理由に加えて、中高年の間で登山等自然とふれあうレジャーがブームになっていることにも関連があると考えられる。大学のホームページへのアクセスをはじめ、公開講座の情報入手手段が多様化していることから、本公開講座には、今後ますます広範囲から様々な期待を持った人々が応募してくるものと予想される。このような情勢を理解したうえで、芦生演習林としては、プログラム内容や実施方法を検討し、より良い公開講座をめざして努力を続け、社会教育活動の一端を担っていく必要がある。

最後に、とりまとめにあたってご協力いただいた芦生演習林の教職員の方々に謝意を表したい。

## 引用文献

- 1) 黒田真人(1996)芦生演習林公開講座参加者の動向 京大演集報.29.101-106.

## 参考文献

- ・枚田邦宏・大島誠一・山中典和・中島皇(1992)芦生演習林利用の実態と意識について. 京大演集報. 23. 129-138.
- ・西口親雄(1984)大学演習林そのもうひとつの存在意義. 林業技術.504. 2-6.